

巻 頭 言

2018年のサムライ・ブルー

多根総合病院 副院長 小川 竜 介

渡瀬先生の後を引き継いで、今回（第8巻）から多根総合病院医学雑誌編集を担当させていただきます。渡瀬先生、長い間、本当にご苦労さまでした。

さて、ようやく冬らしくなった12月中旬にこのご挨拶文を書いています。今年一年を振り返ると、いろいろな出来事がありましたが、学生時代にサッカー部に所属した小生としては、寝不足が続いた6月のロシアW杯が印象に残っています。日本は前評判を覆して決勝トーナメント進出を果たしましたが、一方で、一次リーグ最終戦（対ポーランド）で負けているのに攻撃しないという消極的な戦い方が話題になりました。異論はあるでしょうが、一次リーグ突破のための現実的な選択だったと私は思います。昔の日本代表を知っている方は「ドーハの悲劇」（1993年 アメリカW杯予選最終戦、対イラク）を思い出したのではないのでしょうか。あの時、日本は2-1でリードしていましたが、残り時間を考えずにプレーを続け、ロスタイムに相手の最後のコーナーキックから失点しました。意図的にボールキープして時計を進める「したたかさ」を当時は持っていなかったために、日本代表はほぼ手中に収めかけた本大会初出場を逃しました。皆さんは「マリーシア (malicia)」という言葉をご存じでしょうか。Wikipediaによれば、ポルトガル語で「ずる賢さ」を意味するブラジル発祥の言葉です。男女関係における駆け引きにも用いられますが、サッカーでは「駆け引きを行い、試合を優位に運ぶ」行為を指し、「したたかさ」に近い意味合いを持ちます。「マリーシアが足りない」とは、選手の未熟さや経験不足を示す言葉として用いられます。ブラジル代表の主将、その後は代表監督も務めた闘将ドゥンガ（Jリーグのジュビロ磐田でも主将としてプレー）は「日本人は勤勉だが、マリーシアが足りない」と発言していました。アトランタ五輪とガンバ大阪で攻撃的スタイルを貫いた西野監督率いる日本代表が敢えて消極的に戦ったことは、ドーハから25年の歳月を経て、ようやく経験値が上がったと感じます。

サッカー日本代表は「サムライ・ブルー」という愛称で親しまれます。今回の対ポーランド戦は、サムライ（=武士道）の視点からはどうでしょうか。葉隠（江戸中期の書物）に「武士道と云うは死ぬことと見つけたり」という有名な一節があります。ある目的のためには死を厭わ

ないのが武士道精神であるという解釈は本来の意味ではなく、「自己を中心とした利害に基づく判断からの行動は、結局のところ誤った行動になってしまう。本当に最良の行動ができる心境とは、自己を捨てたところ、すなわち自身が死んだ身であるという心境からの判断であり、そのような心境から得られる判断が、自己を含めた全体にとって最良の結果を生む」という意味だそうです（Wikipedia から引用）。

ポーランド戦で日本は0 - 1 でリードを許していましたが、攻めるとカウンター攻撃を受けてさらに失点を重ねるリスクがあり、得失点差とフェアプレー・ポイント（反則数）までも熟考した上で消極的戦術に変更しました。自力突破にこだわらず、他力（コロンビア - セネガル戦の結果）に預ける選択は、決勝トーナメント進出の確率を上げるためにサムライ・ブルーが下した「したたかな」判断で、自己を捨てる武士道にも繋がるのではないのでしょうか。試合後、柴崎選手は「何が大切か、割り切ってやった。そのために必要なプレーだった」と語っていました。社会人に置き換えても、自己の利害からバラバラな判断せずに、個人がチーム（組織）のために判断して統一行動をとることは重要です。主将と監督（管理職）が賢明なリーダーシップを発揮することも前提です。

私は脳神経外科医ですが、手術にはタクティクス（tactics）が必要です。タクティクスは、一般に戦術、兵法と訳されますが、辞書を紐解くと二番目には、マリーシアに通じる「駆け引き」という意味もあります。手術は攻めるばかりではダメで、守り（如何にリスクを回避するか、術中に突発的な出来事が生じた時にどのようなリカバリーを行うか）が重要です。また、どこまで腫瘍を摘出したら撤退するのかを術中の状況（脳腫脹の程度、出血量など）に応じて決定しないとイケない場面もあります。これらの判断には、サッカーと同様に経験値が重要です。個人が実体験を重ねる以外に、学会参加や論文で他人の経験を共有することも経験値を上げるために役立ちます。KHS グループに所属する個人がそれぞれの立場で少しずつ経験値を上げて実力をつけていくために、本誌が役立つことを願っています。